

## 図書 紹介

### 予防接種は「効く」のか?ワクチン嫌いを考える

著者:岩田健太郎 (神戸大学大学院医学研究科)

発行: 光文社 / 〒112-8011 東京都文京区音羽 1-16-6 / Tel. 03-5395-8289 (編集部) /

新書判 / 217 頁 / 価格 740 円 (税別) / 2010 年 12 月 20 日

日本は第二次大戦後の昭和 23 年に、GHQ の政策で「予防接種法」が施行され、伝染病予防のための予防接種が強制的に始められ、大きな成果を上げた。しかし、その副作用がマスコミによって大きく採り上げられたことで、厚生省 (厚労省) や医療界は萎縮して伝染病を「見なかったこと」にすることにした。そのため、著者によれば、日本の予防接種は欧米に比べて 20 年遅れているという。

本書は、なぜ予防接種は嫌われるのか、開発と副作用による事故をめぐる歴史も振り返りながら、日本の医療政策、メディア、そして医療の受け手側の問題点などを明らかにしている。

第 1 章 ワクチンをめぐる、日本のお寒い現状

第 2 章 ワクチンとは「あいまいな事象」である

第 3 章 感染症とワクチンの日本史—戦後の突貫工事

第 4 章 京都と島根のジフテリア事件—ワクチン禍を振り返る

第 5 章 アメリカにおける「アメリカ的でない」予防接種制度に学ぶ

第 6 章 1976 年の豚インフルエンザ—アメリカの手痛い失敗

第 7 章 ポリオ生ワクチン緊急輸入という英断—日本の成功例—

第 8 章 「副作用」とは何なのか?

第 9 章 「インフルエンザワクチン」は効かないのか?—前橋レポートを再読する—

第 10 章 ワクチン嫌いにつける薬

小見出しの第 1 章では、ワクチン中止と感染症の復活、抗生物質はワクチンの代りにならない、開発に優れるが運用の質が低い日本などである。第 2 章では、2009 年のパンデミックが議論にもたらした成熟、マスコミのバッシングにはマスコミのバッシングをなどである。第 3 章では、戦後の突貫工事で作られたワクチン制度、集団接種はよくないものなのか、ゼロリスクという幻想、リスクはゼロにできないから始まる発想などである。第 4 章では、毒素そのものが混入したワクチン、世界で起きたワク

チン禍による被害、なぜ検定の「すり抜け」が起きたのか、被害者がいれば加害者が必要という世界観などである。第5章では、なぜワクチンに関して「アメリカ的」でなくなるアメリカ、添付文書は「聖典」ではないである。第6章では、「起きたらどうしよう」から「起きるだろう」への変化、ワクチン接種を後押しなどである。第7章では、ポリオワクチンの開発—生ワクチンと不活性化ワクチン、広がるポリオの集団感染—自己負担が足かせに、「福音」から「災厄の種」へ—実際のポリオより大きくなった副作用などである。第8章では、社会問題化しはじめた副作用、相次ぐ訴訟—「個人防衛」重視の姿勢へ、「副作用」と「副反応」—言葉の問題などである。第9章では、One for all, all for one—個人の免疫、群れの免疫、続々と発表されている「集団予防効果あり」の論文などである。第10章では、脚気の論争—帰納法がうまくいく例が多い医療の世界、「ワクチンが無効」という主張だけは反証しておきた、自然でないワクチンは体によくない?などである。巻末には予防接種関連の略年表、参考文献がついており、理解を深めるのに役立つ。

今年も季節性インフルエンザが流行っている。ワクチンは本当に効くのだろうか。著者によると、「必ず効く」わけではないが「確実に効果はある」という。ワクチンをクルマのシートベルトに喩えて、交通事故に逢ったときにシートベルトしていても必ず助かるわけではないが、「助かる確率」は上がると述べている。ワクチンは打っても打たなくてもほとんどの人に何もおきない。因果関係が確認できないことが、ワクチンを打たない理由だろう。

本書は、予防接種とそれを解釈する様々な人間について比較的中立的な立場で書かれており、予防接種に関わる関係者も受ける側にも読んで頂きたい(学会事務局)。